

第 109 回ドイツ病理学会に参加して

北海道大学大学院医学研究院腫瘍病理学教室教授・北海道大学病院病理診断科科长

田中伸哉

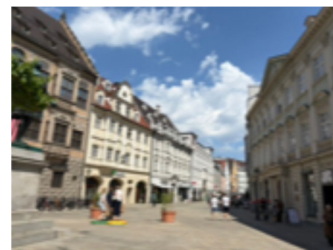
1. アウクスブルグへ

この度、日本病理学会から日独国際交流の一環で 109th Annual Meeting of German Society of Pathology (DGP: Deutsche Gesellschaft für Pathologie) 第 109 回ドイツ病理学会 (2026 年 5 月 28-30 日、Augsburg) に派遣していただきました。5 月 26 日の夜 10:55 羽田発の ANA の深夜便 NH217 でミュンヘンに向かいました。北極圏を通るフライトで約 14 時間半の長旅でしたが、順調なフライトでした。出発直前に ANA のラウンジで、ドイツ病理学会事務局の Jörg Maas 事務局長から、学会前日は会長招宴に招待、2 日目には日本病理学会に対して表彰を行うので出席してほしい旨連絡を受けました。その件で、日本病理学会の事務局と理事長、国際交流委員会委員長とメールで連絡を密にしながら臨みましたが、思いの外、機内のネット環境が良くて助かりました。

ミュンヘンには 5 月 27 日の朝 6:00 にフランツ・ヨーゼフ・シュトラウス国際空港に到着しました。空港からミュンヘン中央駅までルフトハンザの運行するバスで (13 ユーロ)、約 50 分で到着しました。到着してまず感じたことは、「暑い！」でした。最高気温が 30 度で、皆半袖半ズボン。そのような中、ミュンヘン中央駅は大掛かりな工事中で、すぐに駅の建物がわからず、入り口を見つけるのに 20 分くらいかかりました。当初、到着当日は行事がないため、ミュンヘンにある BMW 博物館の見学を予約して楽しみにしていたのですが、その日に会長招宴があることが直前に判明したため、「のんびり博物館に行っている場合ではない！」と、滞りのない任務遂行のためすぐにアウクスブルグに行くことにしました。チケットの自動販売機の案内がなかなかわからず、Omio というアプリをダウンロードして購入しました。アウクスブルグには片道約 3000 円、およそ 50 分で到着しました。ホテルは駅に隣接する Rugs Hotel でしたので、すぐにチェックインできました。アウクスブルグは、ドイツの中でも非常に古い歴史のある街で、名前はローマ皇帝のアウグストゥス帝にちなんだものです。ちなみに 8 月の August もローマ皇帝にちなんでいることを初めて知りました。旧市街も綺麗な建物が多く、観光客も多いためか活気を感じました。また、比較的狭い古い石畳にもトラムの線路が完備されており、路線バスを含めて縦横に走っていました。

2. ドイツ病理学会

会長招宴は、会場からタクシーを準備してもらっており、中国人の病理医 3 名とカンボジアの Chhut Vathana 先生と乗り合わせでした。会場はなんと IZAKAYA という名の日本食屋でしたが、居酒屋とは名ばかりで、外観は普通のレストランでした。間もなく会長の Bruno Märkl 先生らが到着し、全体で 40 名弱の夕食会となりました。まずは、ドイツ病理学会理事長の Christoph Röcken 教授にご挨拶をさせていただきました。とても気さくな先生で、「Ki-67 の Ki の意味がわかりますか？」と聞かれ、戸惑っていると「うちの大学で見つけた分子だから Kiel の頭文字だ



アウクスブルグの街並み



学会前日の会長招宴 (IZAKAYA)

よ」、と笑っておっしゃっていました。Vathana 教授はカンボジア病理学会の取りまとめ役で、日本の病理医が教育に来てくれてとてもありがたいと、伊藤智雄先生や若狭朋子先生らのお名前を出して感謝されました。4月の札幌での総会にもカンボジアの先生が参加してくださり、こちらからも御礼ができて幸いでした。

Bruno Märkl 先生はとても気さくな先生でした。会の中で特別な催し物はありませんでしたが、夜になると気温も少し下がってきて、また夜9時半位までは外も明るく、会は10時過ぎまで続き、和やかな晩餐会でした。

5月28日から学会が始まりました。参加者は約840名、演題は約350題、1000人規模の大会場が1つ、300人規模の大会場が1つ、あとは80人程の小会場が4つと、日本の病理学会よりも規模は3分の1程度の印象でした。ポスター発表では、実際に掲示して座長がついて discussion されるものは100題ほどで、あとはE-Posterとして会場に3箇所程度閲覧できるようになっていました。病理専門医は役所が完全に管理しており、ドイツ病理学会としては専門医の正確な数は把握していないが、診断に特化したクリニックに勤務する病理医が相当数いるとのことでした。



ドイツ病理学会理事長
Christoph Röcken教授と



学会場：コンgresホール



学会場内：機器展示の様子



メイン会場の後方でポスター発表

各セッションの発表時間はおよそ一人15分程度が多く、AIやデジタルに関するセッションが多くありました。中国-ドイツ合同セッションとして脳腫瘍病理の発表がありました。中国国内から、新しい entity の Glioneuronal tumor with ATRX alteration, kinase fusion and anaplastic features (GTAKA) を数例まとめた報告がありました。また、ドイツでも病理解剖が減少しているということで、病理解剖について考える、というパネルディスカッションがありました。病理医ばかりではなく、法医の先生や獣医の先生も登壇していました。「剖検のスキルが継承されないで、将来は専門領域の1つにすればいいのではないか」、あるいは、「全臓器腹腔鏡でのネクロプシーなど手順が劇的に変わるのではないか」など、様々なコメントがありました。剖検数の減少は、多くの国の病理医の悩みの1つであることを再認識しました。

学会場では、現在ミュンヘン工科大学にいらっしゃる Günter Klöppel 先生、笠島敦子先生とお会いしました。お二方とも初対面でしたが、その日の Klöppel 先生が主催される仲間うちの夕食会にお誘いいただきました。夕食会は近くの Restaurant Symposium というギリシャ料理のお店でした。来年の110回ドイツ病理学会の会長の Irene Espositi 教授などドイツの先生方と交流を深めることができました。集まる先生



Klöppel先生（左から3番目）主催の夕食会。左から2番目が笠島敦子先生、右端は来年の会長のIrene Espositi先生。

方の経歴をお聞きしながら、ドイツの大学で主任教授になることの難しさが良くわかりました。

3. ミュンヘン工科大学（TUM）医学部病理学教室の見学

29 日木曜は、朝 9 時 45 分から表彰式ということでした。最高気温が 23 度と前日からは急に下がり、これなら比較的活動できると安心しました。表彰式では、学会に貢献した先生が一人ずつ、あるいは若手ポスター賞などはまとめて呼ばれ始めました。日本病理学会も呼ばれ、壇上に上がり、Christoph Röcken 理事長から表彰状を受け取りました。

その後、笠島敦子先生のお取り計らいでミュンヘン工科大学医学部病理学教室へ見学に行く予定でしたが、なんと Klöppel 先生が車なので乗って行かないかとのことで同乗させていただきました。Klöppel 先生は、「アウトバーンは市街に近いと 120 キロの制限があるが、都市間は時速制限なし、それがドイツのパワーだよ。」とご機嫌で、快晴の中、おそらくメルセデスは時速 180 キロ近く出ていたのではないかと思います。道すがらドイツ皇帝の歴史のお話を聴きながらあっという間にミュンヘンに到着しました。そして、有名なニンフェンブルク城に観光に連れて行ってもらい、ゆったりと散策ができて、有意義な時間となりました。

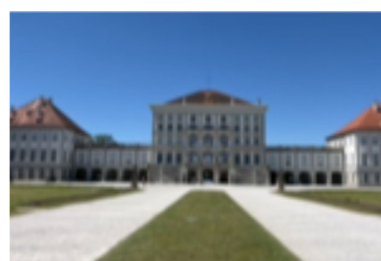
その後、TUM の玄関先まで送っていただきました。ミュンヘンには医学部が 2 つあって、1472 年に設立された歴史の古いミュンヘン大学（ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン）の医学部生は 1 学年が約 400 名、1868 年設立の新しいミュンヘン工科大学の医学部（1967 年設立）は 1 学年が 80 名で、一緒に講義を受ける場面もあるとのことでした。ミュンヘン工科大学（TUM: Technische Universität München）はノーベル賞受賞者を 19 名も輩出しており、ドイツで最も名門の工科大学です。医学部には非常に高い得点を得た学生が入学しているそうです。

ミュンヘン工科大学の病院、医学部は笠島先生にとっても丁寧にご案内いただきました。特に病理は 5 階建てのビルディング 1 棟として独立しており、全ての階を丁寧に見学させていただきました。病院は約 1500 床で、他院からの標本の診断もあり、年間 2 万件近い診断件数があるとのことでした。診断のサインアウトができる病理医は約 15 名、トレーニング中の病理医は約 15 名程度とのことでした。また、全ての症例が WSI 化されており、Leica 社のスキャナー Aperio が 6 台フル稼働しており、1 日 2000 枚のプレパラートをデジタル化しています。さらに HAMAMATSU Photonics 社のスキャナーが 2 台入るところでした。

外国の医師免許を持つオペレーターが常時標本の読み取り状況を把握しており、スキャンミスにすぐ



日本病理学会がドイツ病理学会から長年のパートナーシップに対して表彰を受ける



ニンフェンブルク城



ミュンヘン工科大学（TUM）LeicaのスキャナーAperioが6台稼働しており、標本の完全デジタル化がなされている。笠島敦子先生の診断室の様子。病理医は全員個室で、愛犬と勤務可。左下は秘書さんの部屋。

対応していました。プレバートは全症例がデジタル化されており、ほぼ 100% デジタル診断とのこと。例外的に、前立腺ではいわゆる大切片が作製されており、まず顕微鏡でみて診断して、その後、時間のかかる定型外のスキャンを行うとのことでした。笠島先生も全例デジタル画像を見るので、マウスを細かく動かす場面が多く、なるべく指の関節に負担のかからない配置のマウスを使用していました。全例スキャンの完全デジタル化が進んだのは、メルケル政権があらゆる分野のデジタル化を進める施策に高額の予算を使ったこと、従来工科大学が背景なので、大型サーバーを組むにせよ、大学内での協力で物事がスムーズに進むことが挙げられました。デジタル化全体の管理者、VS 化する部分の専属の担当者と、専属の管理者が必要ということが現場を見ることで十分に把握できました。

ちなみに、秘書の方にお会いしたさいに、ふと見ると足元に、コリーのような犬が寝ていました。「犬がいていいのか？」と心底驚きましたが、よく聞くと病理医には全て個室があてがわれ、犬を連れてきている人も数名いるとのことで、ドアにその犬の写真が貼ってありました。愛犬と勤務することを着任の際に条件にした先生もいたとかいないとか、いずれにせよ、ペットというよりはカンパニー犬が日常生活に定着している文化の違いをあらためて感じました。

地下の講義室、剖検室、サーバー室、バイオバンク室など一連の施設も全て見せていただき、その後、笠島先生にミュンヘン市街地の名所、マイエン広場と新市庁舎、教会などをご案内いただき、オペラハウスの前の SPATEN のお店でドイツビールを味わいました。

5. セッションと帰国

30 日土曜日は、午前中に病理学会ジュニア枠派遣の深川彰彦先生（東京大）が One Health2: Translational Pathology Across Species: Epigenomics, Multi-Omics and Disease Modeling のセッションでご発表。12:45 からは、One team4: Tumor genomics and tumor microenvironments として、4 名から成るセッションの最初に、ハイドロゲルによるがん幹細胞の誘導法と応用について自分の発表を行いました。セッションの最後は、もう 1 名のジュニア枠派遣の安藤俊範先生（広島大）のご発表でした。深川先生



腫瘍周囲微小環境の講演の様子

は、国立がん研究センターでの最先端のゲノム解析の成果を包括的に提示、安藤先生は口腔扁平上皮がんにおける YAP 経路から派生するシグナル状態について、分子生物学的に最前線の成果を提示されており、レベルの高いジュニアからの発表となり、日本病理学会のプレゼンスは高まったのではないかと思います。

31 日は、朝 6 時 40 分の ICE でアウクスブルグ駅を出発してミュンヘン中央駅へ。その後バスで国際空港まで行き、搭乗ゲートには 2 時間前に到着して余裕を持って 11:15 発の NH218 便に乗り込みました。帰りも非常に順調な飛行で、11 時間 50 分かかる予定が 30 分も早まり、朝の 7 時前に羽田に到着しました。

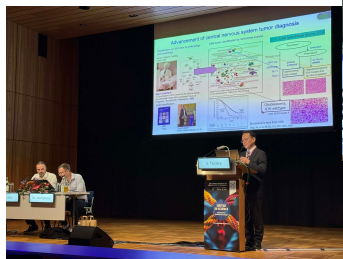
今回、ドイツ病理学会に初めて参加しましたが、理事長、会長の先生をはじめ、会員の先生方と間近に接することでお人柄などがよくわかり、貴重な経験となりました。日本病理学会の国際交流委員長はじめご関係の皆様へ感謝いたします。



109th Annual Meeting of German Society of Pathology (DGP) ドイツ病理学会 (Augsburg) 5.28-30,2026



学会場：コンgresホール



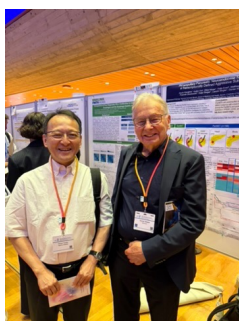
腫瘍周囲微小環境の講演の様子



日本病理学会がドイツ病理学会から長年のパートナーシップに対して表彰を受ける



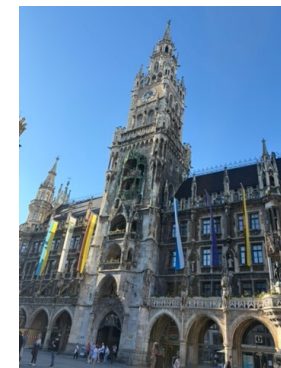
ドイツ病理学会理事長
Christoph Röcken教授と



Günter Klöppel先生と



学会前日の会長招宴 (IZAKAYA)

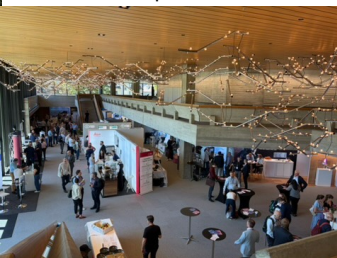


ミュンヘン訪問

マリエン広場の新市庁舎



ペーター教会



学会場内：機器展示の様子

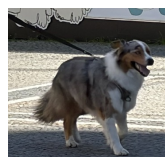


アウクスブルグの街並み

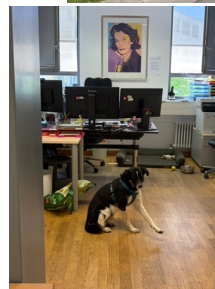
ミュンヘン工科大学
医学部病理部門見学



Klöppel先生 (左から3番目) 主催の夕食会。左から2番目が
笠島敦子先生、右端は来年の会長のIrene Esposit先生。



市街地でも犬を
連れている人が多い



秘書室の様子



LicaのスキャナーAperioが6台稼働しており、標本の完全デジタル化がなされている。笠島敦子先生の診断室の様子。病理医は全員個室で、愛犬と勤務可。



ニンフェンブルク城